

[第9回学術集会公開シンポジウム：家族看護の実践は、どこまでできているか—家族のニーズに応えるために—]

家族支援の連携システムづくり —家族セルフケア機能を高めるため—

岩手県軽米町健康ふれあいセンター

畠山 貞子

1. はじめに

私が歩んできた30年間の地域保健活動で、健康相談や家庭訪問を通じて家族関係の複雑さや家族の力、限界など様々のことを学んだ。精神障害者家族会で、病気の娘を心配する母親が「一生がストレスだ」という言葉に大変心が痛み、改めて家族に対するケアの重要性を感じた。①患者・家族を地域で支える連携システム作り②精神障害者家族会活動の支援、この2つの実践活動から家族看護と看護職の役割を考察する。

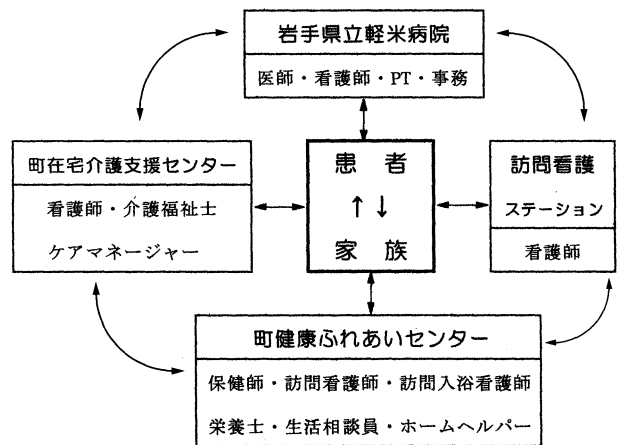


図1. 軽米町保健医療福祉連絡会

2. 患者・家族を地域で支える連携システム作り

平成4年度に地域の中核医療機関である岩手県立軽米病院と軽米町健康ふれあいセンターが合築し、予防からリハビリまでの「県」と「町」の連携システム作りに取り組んできた。「県」と「町」の連携は、昭和58年度にスタートした「軽米町保健医療福祉連絡会」(図1)が核となっている。保健医療福祉分野の関係者が、毎月1回、事例検討(入退院を繰り返す患者、医学的管理を要する在宅療養者、家族関係が複雑なケース等)を行い、連絡会は重要な地域の社会資源となっている。

この事例は、連絡会で検討を重ねたことにより在宅で終末を看取ることができたケースである。また、事例が一つのモデル的な役目を果たし、関係機関の連携がより深まった。

1) 連携システム作りと保健師の役割

①地域で保健医療福祉サービスをトータル的に調

<p>事例：男性 76歳 介護者(妻)</p> <p>脳梗塞による左片麻痺、下肢閉塞性動脈硬化症で左下肢切断、気管切開、小腸ろう造設、留置カテーテルなど医学的管理が多いターミナルの在宅療養者である。</p>	<p>○介護保険サービスを最大限に利用し、本人・家族が希望する在宅生活を可能な限り長くできるように支援方針を立てた。</p> <p>○介護指導、緊急時の対応など保健医療福祉関係者、消防署が連携しながら介護者である妻を支えた。</p>
---	--

整する機能があることは、地域全体の看護やケアの質の向上に繋がった。②保健師が継続的に連絡会を運営してきたが、事例を通して、保健医療福祉の広い視野から患者や家族を援助する技術の向上に役立った。③現場に合った使いやすい連携システムは、事例を通しシステム化していくことが最も適切な方法だと分かった。

3. 家族の生き方を支える活動＝精神障害者家族会活動から

平成8年度にスタートした軽米町家族会「ふれあい会」の活動は、家族のセルフケア機能を高める重要

な活動である。

1) 家族会定例会活動

初めて参加した家族だったが、参加者同士の話しに安心と信頼を感じた様子で、息子の異常行動について悩みをポツリポツリと話し始めた。それを聞いていた参加者が「本当に家族の気持ちはみんな同じだ」と共感し、その家族も自分の体験を語った。二人のやりとりに多くの参加者がうなずき、家族同士の共感が広がった。

2) 参加者（家族）の思い

①家族間の会話が生まれ、家庭が明るくなったことが何より嬉しい。②家族の思いを話せる場があることで気持ちが軽くなった。③家族が元気にならなければ、障害者も元気にならない。④家族自身も楽しむことが良いことだと気づき、リフレッシュを大事にしていきたい。⑤学習（講義や体験談等）を重ねていくうちに、病気はあっても個々人をプラスの評価ができるようになり、家族関係にも良い関わりが生まれてきた。⑥家族が病気や障害を受け止め、周囲に隠さない生き方ができるようになった。⑦指示命令的な言葉がけが少なくなり、家族として温かく見守る姿勢が大切だと思えるようになった。

家族会活動を重ねていくうちに家族同士からの学びが深まり、しだいに家族の気づき・考え方・

行動に変化が見えてきた。しかも、家族自身の変化が障害者本人に良い影響を与えていることに気づいてきている。

3) 家族会活動を支える保健師の役割

①家族自身が解決方法を選択し決定できるように、主体性を尊重しながら問題の解決方法を提案・助言しサポートする。②話に入れない人へ声がけし、話しやすい雰囲気をつくる。家族と看護職の相互作用によって家族同士の共感や交流が深まり、家族のセルフケアが高まる。③集団的アプローチから必要に応じ個別のアプローチ（個別相談・家庭訪問など）へ繋げる。④家族は、看護職に支えられることが何より気持ちが安らぐ。家族の苦労や不安な気持ちを聴いてもらいたい。（家族の話から）

家族のセルフケアを高めるための看護職の役割は、患者や家族が病気と向き合い自らが回復に向け行動できるよう家族関係を調整し、側面から援助することである。

謝 辞

今回、家族看護の視点から保健活動を深める機会を与えてくださった横田碧先生はじめ、ご指導いただいた関係者の皆様から感謝申し上げます。